

# 仙台教区報

発行所 カトリック仙台教区事務所  
 980 仙台市本町二丁目2番12号  
 電話〇二二二-22-7371 一番  
 編集・発行人 三浦 平三

## 贖いの特別聖年のクリスマス

### 救い主のお恵みを深く考えよう



一九八三年の最終月を迎えた。贖いの特別聖年(来年4月22日まで)であり、「小教区にキリストの平和」を司牧目標とした一年だった。はたして小教区教会に、また私たち信徒一人ひとりに、どれほどの成果があったろうか。私たちは神の国実現のため、少しでも霊的進歩をするよう心がけねばならない。

### 11月27日新教会法が公布

待降節第一主日より毎年の典礼暦がはじまる。今年に改正された新しい教会法が待降節第一主日の11月27日に公布され、名実ともに新しい教会のスタートとなった。日ごろ教会法を意識しない信仰生活だが、教会法は信仰共同体である教会(私たち神の民)の、秩序と方向を確かなものにする重要なものであることはいうまでもない。

「教会の刷新と現代への適応」をねがった第二バチカン公会議の成果でもある新しい法典は、現在日本語訳が進められ、いずれは私

たちも容易に手にすることが出来るだろう。カトリック誌などに解説が掲載されているので是非お読み願いたい。(声10月号など)

### 召命促進はまず寡困気づくり

12月3日は日本に初めてキリスト教をもたらした聖フランシスコ・ザビエルの祝日。4日は邦人司祭育成の日である。来春、教区では板垣勤、川村英成両神学生が司祭に叙階される。最後の準備に励んでいる二人のため、心から祈ろう。司祭召命の促進は、仙台教区にいま最も必要なこと。しかし司祭召命の成果を確実にするためには、教区全体にその認識が進み寡困気がつくられること、また私たち一人ひとりの信仰生活の向上が、かけがえない基盤であることを理解しよう。

### クリスマス、贖い主のご誕生

今年のご降誕祭は当然、贖いの特別聖年のものとして私たちは迎えねばならない。この

一年、特別聖年のさまざまな催しや行事で、主イエズス・キリストの救いのみ業を深く考えてきた。信仰生活の核となるものである。私たちが誕生を喜び祝いおん子イエズスこそ、救い主にほかならない。私たちが愚かであるときも、惨めであるときも、ご自分の十字架上の血で贖って下さった、私たちにもっとも身近なお方なのである。

### 来年の課題は社会への働きかけ

来るべき新しい年を、どのように迎えるべきだろうか。教区司牧目標は三年目に入り、「キリストの平和を社会に」と進む。これまでに家庭に、私自身に、小教区教会につちかってきた「キリストの平和」を、広く周囲の人びとに分ち合うのである。福音宣教であり、使徒職の遂行でもある。

おそらく、これまでの司牧目標実践に不足をおぼえるだろうが、社会に働きかけることよって補われてゆくだろう。必要なことは「やる気」であり、恵みをもとめる祈りである。

### 司教日程 (11月14日現在)

- 12月2日 中央協議会財務委員会(東京)
- 5日 教区司祭団月例会(仙台)
- 12日 教区司祭団役員会(仙台)
- 13~17日 司教会議(東京)
- 19日 カリタス・ジャパン会合(東京)
- 24日 クリスマス深夜ミサ(元寺小路)
- 1月1日 新年の平和ミサ(元寺小路)



# 「神の家」建設に信徒の努力みのる

## 八戸・塩町教会新聖堂献堂式



「よろこびに心はずませ神の家にゆこう」  
 11月23日午前10時45分、晴れわたつた秋空に賛歌がひびき、教区各地から集まつた30人の司祭とともに、教区長佐藤千敬司教は新聖堂を進み祭壇に向かった。聖堂に溢れた約四百人の塩町教会の信徒は、この日を深い感慨をもつて迎えた。司教はまず聖堂をはじめ、司祭館等の付属施設を聖水で祝福、初めての感謝の祭儀を進めた。説教は、新聖堂建設に示された限りない神のいつくしみと、具体的に建築に協力された方々への感謝を第一に、また力をあわせて新聖堂を現実のものにした塩町教会の信徒の労をねぎらい賛えた。そして今後

この祈りの家を中心に、さらに地域の福音宣教につとめるよう励ました。新祭壇が祝福されてミサは続いたが、聖歌隊の声も力づく喜びをつたえ、盛大に献堂のミサを終えた。式後、佐藤司教より山添設計事務所、前田建設工業、ジロ・カロン神父、聖ウルスラ修道会、木村富蔵夫妻の建設功労者に感謝状と記念品が贈られた。

### 苦勞もいまは大きな喜び

午後2時から市内のブラザホテルで行われた落成祝賀会は、喜びの百色につつまれた。信徒会長中村道夫氏のあいさつ、主任司祭・

神父がこれまでの経過、司牧評での審議状況について説明した。ついで各会から意見や希望が述べられたが、計画の大すじに賛同したものの、具体的推進事項が示されないので、三浦神父が示した建設委員会設置のプラン説明をきき、早急の設置を望んだに止つた。

### カテドラル建設具体案待ち

#### 明年6月盛岡で司祭大会

司 祭 評

仙台教区秋の司祭評議会定例総会が11月14日、元寺小路教会信徒館で開催された。開会の祈り、聖書朗読のあと佐藤千敬司教があいさつ、ベトレヘム会管区長ツゲル神父が議長となつて審議に入つた。今回は先日の司牧評議会で取上げた議題が主になり、報告や司牧評への協力ということで終つた。

①カテドラル建設計画の推進。提案者三浦

②家庭の日。実施にあつては各地区、各小教区に委ねることとした。

その他、来年予定している教区司祭大会はベトレヘム会が担当し、6月ごろ盛岡で開催することにした。

児山六七男神父のあいさつには、新聖堂建設に示された信徒の意気込み、さまざまな苦心、そして多くの人々の協力への感謝が語られ、深い感銘をあたえた。

八戸塩町教会はすでに70年以上の歴史をもち、パリ外国宣教会、ドミニコ会、ケベック外国宣教会、邦人司祭が担当して今日に至つている教区でも有数の教会である。旧聖堂の老朽化や、付設幼稚園の拡充などによつて聖堂改築が必要になり、具体的には昭和51年より新聖堂建設の準備をはじめてきた。そして塩町小教区信徒の力を結集して今日をむかえた。自分たちの祈りの家を自分たちの手で、という理想を達成したわけで意義は大きい。このことは形に見える聖堂建築にとどまらずに、塩町教会の信徒の一致に大いに役立ったであろうし、さらには今後教区内に見られる聖堂改築、とりわけカテドラル建設などに少なからざる影響を与えることになろう。

新聖堂は、聖堂の他に小聖堂、執務室(2)、司祭館、信徒集會室などがあり、教区では教少ないモダンな建物である。建物延面積五六三・九三九平方メートル、コンクリート平屋、司祭館部2階建、13・5メートルの鐘楼に3・1メートルの十字架がつく。設計は山添建築設計事務所、施工前田建設工業株式会社仙台支店、本年3月15日着工、11月23日完成した。総工費一億一千三百万円。

なおこの献堂・落成式には、教皇大使マリオ・ピオ・ガスパリ大司教が参列を約束していたが、6月に急逝されたのは残念だった。

面目一新して新園舎成る

創立30年 石巻カトリック幼稚園

創立30周年を迎えた石巻カトリック幼稚園(園長深沢豊治神父)では、かねて学校法人に組織替えし園舎改築の工事を進めていた。

このほど純白に輝く新園舎が見事に完成、さる11月3日文化の日午後2時より、学校法人宮城カトリック学園理事長佐藤千敬司教をはじめ、卒園生や父兄ら幼稚園関係者、地元関係者、司祭、修道女、信徒など多数が出席して盛大に新園舎落成式典を挙行了した。

聖書朗読、感謝の祈りのみことばの祭儀のあと、理事長、園長が感謝のあいさつ。園児らが声をそろえた「よろこびのことば」にはかくし切れない子どもたちのうれしさがあふれ、広いホールでの落成祝賀会がにぎやかにつづいた。

新園舎は、鉄筋コンクリート造り2階建、園舎建築面積五六八平方メートル、延床面積九一三平方メートル、運動場面積六五〇平方メートル。本年4月1日着工、10月31日完成。設計監督は、みちのく設計。施工は大紀建設株式会社。建物の外観、内装は明るく堅固、建築コンクール「一九八三年SDレビュー」賞を受けた。当然のことながら、ゆつたりとしたつくりなど、幼稚園機能も十分に配慮されている。

石巻カトリック幼稚園は、石巻地方最初の私立幼稚園の歴史をもち、現在地に移つてからは周囲の環境も申分なく、高い評判を得て

いる。幼稚園関係者など地元の理解で、福音宣教の有力な場としての発展が期待される。

小さき者らと五十年

仙台天使園、創立金祝迎う

聖トミニコ女子修道会が経営主体の養護施設仙台天使園(園長村本智子修道女)では、今年で創立五十周年を迎え、11月26日午後1時30分より同園で記念式典を挙行了した。まず佐藤千敬司教司式のミサで、五十年の歴史に示された神の恵みと、協力援助を惜しまなかつた多くの関係者に感謝の祈りをささげた。式典後の祝賀会では、なつかしいあれこれに花を咲かせ、五十年の歴史をかみしめていた。天使園は聖トミニコ女子修道会の来日とほとんど同時に開設され、戦前の無理解、戦中戦後の苦難や混乱を乗り越つて今日にいたつた。修道女をはじめ関係者の愛とごせいが大きく評価される。

山形に支部を開設

オタワ愛徳修道女会



仙台市内で使徒職活動をしているオタワ愛徳修道女会(日本地区長シスター・リーズ・ラミ)は、かねて隣県の山形市に支部を開設する準備を進めていた。このほど支部修道院の建物が完成、12月11日午前11時より、新潟教区長伊藤庄治郎司教の司式で祝別落成式を行つた。

同会ではすでに、山形県の宣教にあたる、イエズス・マリアの聖心会が主体となつて設置した特別養護老人ホームみこころの園のため、修道女を派遣している。新修道院は山形市飯塚町二〇二七番地、シスター・ミシュリース・ウイメトが新修道院長に任命された。

宮城刑務所でクリスマス

12月18日、仙台市古城の宮城刑務所で、収容者のためのクリスマス集いが開かれる。これは同刑務所に通う教誨師が、カトリック、プロテスタント交代に行い、今年のカトリックの番。教誨師三浦平三神父の話と、元寺小路教会、教会音楽グループのクリスマス・キャロルなどが予定されている。収容者は約30人ぐらいが毎回の教誨に出席している。

練成会の案内



対象 司祭、修道者、カテキスタ  
日時 一九八四年1月8日〜21日まで。  
(14日午後〜15日夜は休みの予定)  
場所 仙台市東仙台 光ヶ丘研修所  
テーマ 明日の教会を目指して  
(キリストに生かされた小教区共同体作り)  
MBWが10数年かけて世界各地で実践・研究した小教区作りのプログラムの紹介。  
参加定員 20人  
参加費 4万5千円  
申込みは予納金一万円をそえて12月10日まで。仙台教区事務所  
練成会係り 首藤正義神父宛

### カテドラル建設を理解しよう① カテドラルとは何?



カテドラル建設ということが、だんだん話題になってきているが、その一方にカテドラルとは何か、カテドラル教会は特別なのか、といった声も聞かれる。

カテドラルとは日本語で司教座聖堂と呼ばれている。仙台司教区では、元寺小路教会が司教座聖堂として代々さだめられてきた。そもそもカテドラルという言葉のカテドラとは、司教がミサを行う場合に使用する椅子の意味で、元寺小路教会の祭壇背後にある背もたれの高い椅子がカテドラ(司教座)。そしてそのカテドラが置かれている教会をカテドラル

### 性教育学習会に取り組む

小さな生命を守る会 大槻千あき



「小さな生命を大切に、人工妊娠中絶はいけない」といくら叫んでも、ではどうすればいいのか。具体的な解決を示さないと会の実質的活動に結びつかないと考え、佐藤司教様からも励まされ、現在教会でも推めているNFD(ナチュラル・ファミリープランニング)自然な家族計画を含む、性教育学習会を行うことにしました。11月11日夜スベルマン病院で早坂養吉先生、高橋総婦長さん、産婦人科婦長シスター熊谷と約10人の会員が学習会の方法を話し合い、シスター熊谷から積極的な協力の申し出がありました。

というのである。

司教が座るから司教座、教皇が座ると教皇座。この座が転じて司教や教皇の権威をあらわすものにもなった。このカテドラを理解するには、カトリック教会の長い伝統の中に示されてきた教皇や司教の権威といったものをよく知る必要がある。いまから50年ほどむかし、仙台教区は函館教区と呼ばれていた。つまりカテドラが函館にあつたからである。ドミニコ会のレミュ司教が函館司教に任命されたとき、聖座(教皇庁)の許可を得てカテドラを仙台に移した。それで仙台司教区と呼ばれるようになった。それほどカテドラルは教区にとって重大なものであり、それゆえに司教区の母教会といわれているのである。

第一回は11月16日午前9時半から2時間、元寺小路教会信徒館で、シスター熊谷指導の学習会をひらきました。参加者は会員のほかにも、司祭や、信徒以外の方もありました。家族計画の運動史から始まって、NFDのこと、また中絶の実態など真剣に話し合われました。とくに性教育については、こうした会が今までなされなかつたことが不思議であつて、子供たちが性産業に振り回される前に、親を含む大人が真面目に性の問題をとらえ、子供たちに話してゆかなければならないことなど、さまざまな意見が出て活発な会になりました。次回は12月10日午後3時から同所で、早坂養吉先生が男女高校生を対象に、性教育講座を行います。一般の参加もどうぞ。



10月下旬、教区司祭の黙想会があつた。日ごろ多忙な神父様方も、心沈めたひとときを過すことができたようだ。指導は御受難会の国井健宏神父、さすが靈的

指導を使命とする修道会らしく、深い学識と靈性に目を開かれる思いだつた。

話の中で、物忘れが、いいという言葉が出てきて、Y神父がこれを引用してミサのとき短い説教をした。神さまは恐らく人間よりも忘れっぽい方だろう、しかもそれは愛の極地といえるのではないかという話だつた気がする。あまり物覚えがいい方でもないY神父の話に、少しニヤニヤしてきいていたが、やっぱりこれも考えさせられる問題である。

「おぼえてる」とか、「おぼえているからな」という捨てぜりふが、全く愛に欠けるものであることはいうまでもないこと。その反対に「そのことはもう忘れましょう」というのは和解の言葉だ。人からの好意を忘れるのは困るとい方が、人の仕打ちをいつまでも忘れないうよりは実害はないだろう。

だから年をとる子どもに戻つて忘れっぽくなり(子どもの無邪気さはそこにあり、神さまのもとにゆくのだらうというY神父の話に、皆は深くうなずいた。

今年も恒例の教会学校リーダー研修会が、11月2日3日の両日、愛子のドミニコ会黙想の家で行われた。参加者は仙台市内七教会をはじめ、塩釜、大河原、角田、そして福島野田町教会からも参加を得て30人。司教総代理の三浦平三神父様がスケジュールの大部分を参加者と共にして下さった事は、大きな力と励ましとなった。

講師は全国の教会学校関係の研修会で引っぱりだこの、東京教区高輪教会主任の岩橋淳一神父様。東京教区の教会学校部の責任者でもある。プログラムは、三つの講話を中心に、各教会学校の現状報告、リクリエーションなどを組み入れ、最後にミサで共に祈って終了した。参加者の感想などは次のとおり。

**講話**

◎岩橋神父様の話は、魂の深みで深く考えさせると共に私達の心を高めてくれた魅力に満ちたものであった。まず神父様は私達に、リーダー自身が自分の信仰に確信を持っているか、キリスト者としてどのような生き方をしようとしているか、鋭く問いかけられた。

そして子供達をどのように指導するか、何を教えるかではなく、リーダー自身がキリスト者としての確信を持ち、子供達にキリスト者としての生きる覚悟と喜びを伝えていく、それこそリーダーの使命ではないかと語られた。今まで暗中模索の内に教会学校に携わっ

子供達に確信をもって信仰を伝えよう

仙台教会学校リーダー研修会  
(11月2日・3日)

ていた私にとって一筋の光を見つけたような思いと力強いエネルギーを得ることができたことを、本当にうれしく思っている。  
(塩釜教会・佐藤三喜子)

◎私は幼児洗礼であるが、あまり熱心な信者とは言えない。むしろ苦しい時の神だのみの祈りしかしていなかったように思う。

岩橋神父様の話から、祈る姿が、どれ程子供達に影響するか考えさせられた。

特にミサにおいて、聖変化で、大の大人が深々と礼拝する姿は、確かに幼児、子供にとつて驚きであろう。あの白い大きなバンが、ただものではないと感ずる。そして一日も早く初聖体をと、望むようになる。私達のミサにあずかる態度が子供の心をどれだけ動かすかを考え、一つの祈りの言葉をも心から、声高らかにとなえ、主の死と復活をのべ伝えていかなければと感じさせられた。

信仰教育はそこから始まるのかも知れない。(大河原教会・大泉安津子)  
◎神父様は現代社会の中に生きる子供達という点で教会が対社会意識を持つべきだと言われた。教会学校には一流校をめざす子供、校内暴力で荒れる学校で学ぶ子供、物質主義に甘やかされた子供達が出てくる。そして子供達はそういう社会に再び派遣されて行く。教会学校のねらいは、確かであろうか。深く反省し考えさせられた。「日本の教会学校は現在のところ現代社会に対し無為無策に近い」と言われた神父様

の言葉が胸に痛く残っている。  
(豊屋町教会・小川敦子)

**各教会学校の報告から**

◎私にとって各教会の教会学校がどの様に立てられているか強い関心があった。一つの柱を立てて進んでいる教会、試行錯誤で悩んでいる教会、子供の少ない教会、リーダー不足で悩む教会、そして、リーダーがシスターだったり、主婦、学生、お勤めの人、幼稚園や学校の先生、壮年のお父様方だったり、様々なことを知った。いつも私の教会では、との見方をし勝ちであるが、同じ悩みを持ちながら、苦しくてもがんばっている仲間の話を聞き、勇気づけられ、深い共感を分かちあうことができたことは、大きな慰めであった。  
(豊屋町教会・福田研也)

**リクリエーションetc...**

2日の夜はリクリエーションと共に岩橋神父様作詞作曲の二曲の歌が紹介された。ギター伴奏で気軽に子供達と共に歌えるもので、各教会でリーダーが広めてくれるものと期待している。また、参加者に若者が多かつたせいか、夜更けから明け方までわがちあひ(?)が続き、お互いの親睦は更に深められたようである。人里離れた愛子の里の空気は、おもしろく、眠い目をこすりながら朝の散歩を楽しんだ者も多かつたよう。

ドミニコ会のシスター方の心のもつたお世話をいただき、心身共に満たされて、さあ子供達のために、明日からガンバロウ!と大きなエネルギーを得た研修会であった。

おらが教会

(38)

青森・黒石教会



黒石市は弘前の東南約12キロにある小都市ですが、三百年ほどまえ弘前津軽藩から分家してできた城下町です。リンゴ、米、良質の水などが有名で、いわば津軽平野の中心。周辺を合併して二一五・八二平方キロの広さになっていますが、人口は5万人足らずです。盆踊りやヨサレ節も有名です。東に向かう十和田湖への道沿いには、幾多の閑静な温泉郷があります。

この地にキリスト教がもたらされたのは明治11年ごろ、プロテスタントの方が早く、すでに日本キリスト教団黒石教会は百周年を迎えました。私たちのカトリック教会は一九五四年(昭和29年)8月15日の聖母被昇天祭に、聖テレジア幼稚園の一部を聖堂にして始められました。そしてケベック外国宣教会の、プラン管区長様が司式して、献堂式とミサを行いました。その後10月に当時の教区長小林有方司教様がおいでになり、祝別式と祝賀会を盛大に行いました。

すでにこれより数年前から、山形町の小田

桐真彦君の家で会合が行われており、弘前教会からデルエン神父様、フォルテン神父様がおいでになってご指導下さいました。昭和24年聖フランシスコ・ザビエル渡来四百年記念には、デルエン神父様と弘前大学哲学科の教授にお願ひしてカトリック文化講演会を催し、とても盛大でした。

現在の聖堂が完成したのは昭和40年7月18日です。それ以前の昭和32年12月25日のクリスマスには、約40キロ東にある開拓地善光寺平にデュメン神父様がたいへん苦勞して、立派な教会が建てられました。川村郁先生の教えで信者が多くなつたためです。ルイ・クバール賞が贈られた川村先生の働きは、「小野忠亮著青森県とカトリック」に詳しく紹介されています。いまこの開拓地は戸数13戸、人口70人に減少、冬季は約15キロ西の葛川一本木に立派な住宅と集会所を建てて住んでいます。時折、司祭や信徒が訪れて指導しています。

黒石教会はその後信者もふえ、若い人たちの布教活動も活発でしたが、司祭の交替があつたり、信者の移動や適当な指導的信者もありません。信者は減少しました。名簿上は約80人ぐらいいるのですが、主日に参加するのは10人内外です。しかしご復活やクリスマスには50人以上も集まつてにぎやかになります。

昭和44年ごろ、プロテスタントや仏教の方がたとの懇談会も開きました。昭和49年9月にピエール・ルカバリエ神父様が主任司祭としてこられ、一生けんめいお働きになられました。市のいろいろな会合にも加わり布教も

盛んになりましたが、ご病気のため昭和52年4月カナダに帰国、翌年お亡くなりになりました。黒石教会にとつてまことに残念なことでした。

その後は青森からラベ神父様が週3回おいでになりますが、教会を訪れる人も少なく寂しい限りです。しかし熱心な信者の方たちが土曜学校や神父様の英語教室などを通して布教しています。さる7月3日にラベ神父様の叙階25周年銀祝を盛大に行うことができ、たいへんうれしいことでした。

毎日曜日のごミサ後、伝道室でお茶を飲みながら楽しいひとときを過ごし、家族的にやっています。しかしこれから、どのようにして新しい信者をつくり、教会を発展させてゆくかはむずかしい問題です。司祭が常時おられないということ寂しいことですが、これも今日の状況ではやむをえないところです。したがって信者同士のよりいつその団結が必要かと思えます。なお当教会出身の修道女は4人ですが、それぞれ元気に召命の道をあゆんでおられます。(今田 誠一)

【編集後記】



きまり文句になつたが、今年もはや師走。無為だつたと後悔の思いがつよい。それにしてもキナ臭い国際情勢、そして混沌としている現代社会。大変な時代だと思いが、考えようによつては、キリストの福音が今ほど必要とされる時代はないということ。やはり新しい年もがんばつてゆかねばなるまい。

(M)